

会期

2014年10月3日(金)・4日(土)・5日(日)

会場

■愛媛県県民文化会館(ひめぎんホール)
〒790-0843 愛媛県松山市道後町2-5-1 TEL. 089-923-5111

■愛媛看護研修センター(愛媛県看護協会内)
〒790-0843 愛媛県松山市道後町2-11-14 TEL. 089-923-1287

■愛媛県身体障害者福祉センター
〒790-0843 愛媛県松山市道後町2-12-11 TEL. 089-924-2101

学会場への交通



- JR松山駅から
 - ・伊予鉄道市内電車(道後温泉駅)で約15分、南町・県民文化会館前下車
 - ・伊予鉄道バス(道後温泉駅前行)で約20分
- 伊予鉄道市内電車環状線松山市駅から
 - ・道後温泉行で約10分、南町・県民文化会館前下車
 - ・伊予鉄道バス(道後温泉駅前行)で約15分
- 松山空港から
 - ・伊予鉄道バス(道後温泉駅前行)で約40分
 - ・リムジンバスで約30分
- 松山観光港から
 - ・伊予鉄道バス(道後温泉駅前行)で約45分
 - ・リムジンバスで約35分、南町・県民文化会館前で下車

第8回日本緩和医療薬学会年会運営事務局：株式会社日本旅行 中四国コンベンショングループ内
〒700-0023 岡山県岡山市北区駅前町2-1-7 JR西日本岡山支社ビル1階 TEL: 086-225-9281 FAX: 086-225-9305
E-mail: kanwa8@kyodo-mice.jp 学会ホームページ <http://www.convention-w.jp/kanwa/>

Hisamitsu.

薬学関連学会最新トピックス

第8回日本緩和医療薬学会年会 を開催するにあたって

学会長に聞く

学会会期

2014年10月3・4・5日

Hisamitsu.

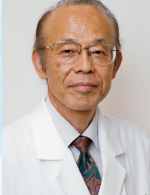
経皮鎮痛消炎剤 ケトプロフェン 2% (医薬品承認) 経皮鎮痛消炎剤 ケトプロフェン 2% (医薬品承認)
モーラス®テープ 20mg **モーラス®テープ L 40mg**

●効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については製品添付文書をご参照下さい。

販売販売元 久光製薬株式会社 〒841-0017 鳥栖市田代町40B 資料請求先：学術部 お客様相談室 〒100-6330 東京都千代田区丸の内2-4-1
2014年最新刊

第8回日本緩和医療学会年會会長
愛媛大学医学部附属病院教授・薬剤部長

荒木 博陽 先生



第8回日本緩和医療学会年會が10月3日～5日の3日間にわたり、愛媛県県民文化会館(ひめぎんホール)・愛媛看護研修センター、愛媛県身体障害者福祉センターの3会場で開催された。本年会のテーマは「輪(つながり)～いま、緩和医療にできること～」。

患者の苦痛をとる緩和医療に注目が集まるなか、薬剤師の役割も増えている。同年会のメインテーマの意図、プログラムの役割どころ、特別企画について、愛媛大学医学部附属病院教授・薬剤部長の荒木博陽先生に伺った。

メインテーマの意図

緩和医療は、特にがん領域において、手術や化学療法に次ぐ第4位の注目に値する重要な位置付けを示していることは周知の通りです。ある統計によると、がんを患う患者さんの割合が縮みと開いており、早期から緩和医療は患者さんのQOLほもありま、生存率にも貢献すると報告するほどに非ステロイド系抗炎症薬(NSAIDs)では効果が薄く、医療用麻薬、つまりオピオイドのWHOの三段階除痛ラダーに基づく使用が必須です。ところが、患者さんともよ医療者のなかにも、いまだオピオイドの使用について否定的なスタンスを持っている人が少なからずあり、わが国のオピオイドの使用量は、欧米に比べて極端に少ないという現状があります。

日本緩和医療学会は、「日本における日益々高まる緩和医療の重要性を鑑み、保険薬局薬剤師、病院薬剤師、学術研究者の連携強化を図り、緩和医療における薬物療法の推進と充実、さらには大学での教育研究と企業での開発・学術研究の進歩発展を、目的に2007年に発足いたしました。しかしながら専門性が高く、また需要も大きいことから、年々、参加人数は増えていきます。

今回のテーマ「輪(つながり)～いま、緩和医療にできること～」、まさに現代の緩和医療では病院薬剤師や保険薬局の薬剤師、企業や大学など所属する研究者の連携が不可欠という思いが考えました。研究者は、ぜひ

臨床の現場に身を置く薬剤師から今の授業のニーズ、患者が「何にも苦痛を感じているか」や「授業の何に困っているか」を聞き取り、今後の授業の参考にしていただきたいです。現場の薬剤師も、緩和医療をスムーズに進めるために何が必要か、他の医療機関の取り組みなどを知り、自身の病院に持ち帰ってほしい。今年会が単なる交流で終わることなく、次のステップの上でさきっかたとなることを期待しております。

見どころ・間きどころ

日本緩和医療学会の第1回年会は「痛み」をテーマにしたシンポジウムと臨床の両面から議論を交わしました。その後、会を重ねることによって緩和医療の割合が大きくなり、昨今の年会では多岐にわたる痛み対策、支持療法に掘り進んでいます。国が推進している「がん対策基本法」でも、「疼痛等の緩和を目的とする医療が早期から適切に行われることが求められています。診療報酬の改定も2012年には緩和ケアに対し診療報酬が新設されたほか、2008年の改定では医師、看護士さんに対して専任の薬剤師の配置が算定要件に追加されました。こうした流れもあり、日本病院薬剤師会や日本医療薬学会ではがん領域に強い薬剤師を育てるべく、専門薬剤師制度や認定薬剤師制度を設けています。

本年会では、自身が基礎の出身だったこともあり、基礎臨床のバンスを考えたプログラム編成にも務めました。会長講演と、特別講演が2題、特別企画が1題、シンポジウムが23題のプログラム構成と

なります。ワークショップ、ランチョンセミナー、坊ちゃんセミナー(モーニングセミナー)もご用意です。

会長講演では、副作用(主に抗がん剤、および放射線療法による)内臓)問題への対策と、外来化学療法で必要とされる薬剤師の2本立てで講演いたしました。前者は主に1日1回ステロイドを用いた実験結果について、後者は当院の薬剤科と保険薬局で行われている外来化学療法の連携を、具体例を交えたものとします。

特別講演1は九州大学大学院薬学研究院の井上和秀先生に依頼いたしました。井上先生はATP受容体の痛みへの関与を神経薬理学的に研究されている先生です。痛みの作用機序の一環を知るいい機会になると、私自身も楽しみにしております。特別講演2では国立がん研究センターの牛島俊和先生にご登壇いただく予定です。牛島先生はがんのシグナルを追求されておられる先生で、がん遺伝といきわめて関心の高いテーマでお話したいと考えています。特別企画では、NPO法人愛媛がんサポートの役員と松山理事長で、キャンサーサバイバーの会理事さんに「がん患者が語る「痛み」というタイトルで講演いただきます。

シンポジウムでは、基礎の分野で痛みの発現と増悪、がん(悪性腫瘍、オピオイド系)の合成経路など、臨床の分野では、抗がん剤の副作用対策や支持療法、多職種のアプローチ(薬学連携、医療用麻薬の安全な臨床活用、海外の緩和医療の取り組み)といったものを取り上げます。ほかにも、緩和医療物療法認定薬剤師講座、診療報酬改定などは

学会内容

I. 会長講演

—荒木 博陽(愛媛大学医学部附属病院教授・薬剤部長)

II. 特別講演

1. 神経障害性疼痛におけるグリアの役割

—井上 和秀(九州大学大学院薬学研究院教授)

2. 抗がん剤とエビジェンティク大薬

—牛島 俊和(国立がん研究センター)上原所長)

III. 特別企画

がん患者が語る「痛み」

—松本 陽子(愛媛がんサポートおれんじの会)理事長)

IV. シンポジウム

- がん習学外来・対話カフェの使命
～がんと共に生きる病気に寄り添う～
- 抗がん剤の副作用対策
- 次世代型「包括的緩和医療」に向けて
- 痛みと緩和医療のマルチファクターな捉え方
- 入院麻薬自己管理の現状と将来に向けて
～問題点とROO(rapid onset opiod)の適正使用を考える～
- MOJ(がんゲノムセンター)で学んだがん医療の課題
- 緩和ケアにおける多職種連携教育(IPC)の現状と将来展望
- 緩和医療とがん患者の心身は?
- 外来薬剤科としての精神科の備えを中心とした「メディカルスタッフ」の役割
- 働く世代の痛みと緩和医療の連携を支援するための薬学アプローチを考える
- ファンクショナル緩和ケアの安全な臨床活用に向けて
- 研究推進委員会企画「次世代型包括的緩和医療における薬剤師に必要な学術知識の整理と臨床研究にむく」の作り方
- 2014年の基礎から臨床まで
- がん・緩和ケア領域における薬学連携の中心(となり)～いかにしてこれら～

14. 難治性のみみする多職種アプローチ

15. 緩和ケアにおける代替医療への期待

16. 緩和ケアにおける代替医療の取得と更新に向けて

～医療現場の働き方と薬学的管理の両面～

17. Palliative care/Supportive oncologyへ

18. これについても悩ましい医療のなか、

どうするか、どうなされるか?

19. 緩和ケアとがん研究センターとの共同プログラム

20. 診療報酬改定から見えた在宅医療の今後

～医療保険・介護保険両委員会から～

21. がん患者の生前葬・埋葬に配慮をなくす

22. がん治療における処方連携の連携と連携に向けて

～がん診療連携拠点病院、患者、三者の連携～

23. 在宅医療推進に向けた課題～医療用麻薬を患者さんのために～

24. 学術論文に投稿しよう!

V. ワークショップ

- 参加型WS-「緩和医療に求められる薬物療法の介入と副作用対策」に関するワークショップ

一般演題・共催セミナー

VI. 一般演題(口頭87題・ポスター232題)

VII. ランチョンセミナー(11題)

VIII. 坊ちゃんセミナー(3題)

多角的なシンポジウムや、厚生労働省職員による講演も用意しております。年会の2日目、3日目はあまり過剰なスケジュールとすることが予想されますので、事前にしっかりとチェックなさっていただければとなります。

一般演題は今回、口頭発表が87題、ポスター発表が232題となります。シンポジウム発表は昨年より100題も増え、緊急会場を拡大しました。われわれも驚くとともに、緩和医療はそれだけ多くの薬剤師が興味を持つ領域であることを再認識いたしました。口頭発表とポスター発表については、それぞれ3題ずつを優秀作品として表彰いたします。対象となる発表は事前にエントリーされたので、年会2日目に発表を

実施し、最終日に結果を公表し、表彰いたします。

開催地・松山について

今回は2日目の夜に懇親会を予定しています。場所は年会の会場から車で4駅離れたところにある白彦ホテルになりました。昨年、松山では「日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会 中国四国支部学術大会」を開催しましたが、その際好評だった催しでもあり、実施する予定です。松山の野暮は、三線と大鼓を合わせたように、賑やかで賑わっているのがおもしろい。ぜひ、楽しんでください。

催しですので、どなたも参加して楽しんでいただければ幸いです。また、愛媛県の名産品キャラクター「みきゃん」も参加予定です。

食事は松山の地産地消をモットーにご用意する予定です。鯛を炊き込むことで新鮮な刺身を熱々のご飯の上に載せていただくという、地元の方に「ひゅうが飯」と呼ばれるのを楽しんでいただけたら幸いです。鯛のほかに、海の幸や山の幸をふんだんに使った料理、そして地酒でもお楽しみさせていただきます。

10月3日～4日と秋空の心地、記憶に残る爽やかな夜を過ごしていただけるよう、運営者一同尽力で参ります。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。